

教務だより

2014年7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

自分を変える夏休み

茗溪塾塾長 宇野 雅春

バスの中で小学生らしき子供と多分母親と思われる女の人の親子げんかのような「言い合い」が突然始まりました。ほとんどバスの中は無言の年配者が多く、二人の声はバス全体に響いています。聞こうとしなくても耳に入ってきます。

母親らしき人が言います。「公立の中高一貫校くらい受検してみようという気持ちはないの？」子供らしき男の子が答えます。「僕は、今のままで十分満足です。だからご心配なく！」きっぱりとしているのは子供の方で、親らしき人は動揺しているように見えます。

「人に負けたくないとか、人よりいい点数を取りたいとか…ないの？」バスの中の人たちの耳がそばだちます（そんな気がしました）。さらにきっぱりと「そんな気は全くないです。僕は今の状況で十分に満足しています。だから心配しないで！」。バスが終点に着いたのでその続きは聴けませんでした。「困った？」と感じたのは私だけだったかもしれませんが、その後話し合ったとしても母親らしき人がその子に考えを改めさせることは全く不可能…という印象でした。

最近では子供達が「ありのままの自分…」という歌を口ずさんでいるので、なおさら心配になります。最近の若者の多くは、現状に満足し、自分を変えようとか、もっとこうなりたいとかがない傾向にあるとよく言われています。でもここまで確信を持って、「満足です。」と言われるのは心外です。友達と楽しくその日一日が無事に過ぎていくこと…それだけで十分ということなのか？そのささやかな幸福を作るために、親がどのくらい大変な思いをしているのかわからないのではないかと思ってしまう。というより、その苦勞の部分だけは子供には見えないのかもしれない。

自分も親の年になって初めて親の大変さに気づくことが多かったので、やむを得ない事なのかもしれないのですが、この頃は確かに「時代が違う」という印象です。今の親の世代も既に高度成長を遂げた日本がスタートラインですから、私達ほどの上昇志向（「貧しい日本」からの脱却）はないかもしれません。

ただ、世の中はひと頃より遙かに厳しくなっている気がします。「格差社会」もますます進行しているように思えますし、「努力なんかしなくて大丈夫！」という感じは全くないのです。子供はいずれ親から自立し独り立ちすることになるだろうし、少子化によって年金制度がどんどん変わっていく中で、老人も楽隠居出来ない状況は急激に現実化してきています。全く「大丈夫！」といえる状況ではなく、若い人たちでもワーキングプアという「働いても働いても、生活できない層」が着実にふえています。また、自分が困らなければそれでいいというものでもありません。多くの仕事は、自分のためだけでなく人のためにも存在します。社会に貢献することも、これから成人していく人たちの重要な役割でもあります。『ありのまま…』は強い決心と自分への自信に裏打ちされて初めて成立するものではないのでしょうか。（まだ映画を見ていないのでよくわかっていませんが…）

少しずつ努力し、自分を成長させ世の中をしっかりと見つめていける力をつけるものが学問だと思います。「受験」はそこへの登竜門であり、きっかけです。長い夏休みが始まります。勉強よりいろんなことを体験したい気持ちの方が強い生徒はたくさんいると思いますが、「勉強」が全てのベースになることを、忘れないでほしいと思います。

自分の中に将来への問題意識を持つチャンスでもあり、受験勉強を中心にした生活習慣を身につけることで、自分の可能性を大きく広げることが出来るはずです。

個人的な意見ですが、人生は山を登るようなものです。高い山へ行けば行くほど景色は雄大になります。「歩く」というきつい作業なしには見る事ができない景色が確実にあります。それを見ることなく終わるのは残念な気がします。

夏は自分を変える（成長させる）チャンスです。茗溪塾が目指す重要ポイントです。